
子猫のワルツ

兎紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子猫のワルツ

【Nコード】

N9039N

【作者名】

兔紗

【あらすじ】

私はただ知りたんだ、自分がここに存在する意味を。主人公は、少々大人っぽいのが特に目立つことの無い普通の子。それでも、新しい仲間に引きずられるようにして少しずつ自分なりに才能と勇気を開花させる。

出会いのお話(前書き)

ハンター×ハンターの二次創作になります。
オリキャラが出てくるので注意して下さい。
これから、よろしく願いします。

出会いのお話

『そう、簡単に試験管さんとか受験生の皆さんを殺されたら、困るんだけど、お兄さん』

コツコツと靴の踵を踏み鳴らしながら、

一人の少女がピエロ風の容姿の男に近寄っていく

「おかげで下手したら、試験が来年まで伸びそうじゃないの」

「おや、君は誰だい？」

「私？私は、シュナ、お兄さんは、確かヒソカさん、だよな？」

「正解、よく知ってたね」

ヒソカと名乗った男は舌なめずりをするように

少女の全身を隈なく眺め見ると、微笑んだ。

「うん、君は、合格だ」

今年の試験は再開されたとしてもつまらないだろうし、だから、再開されたとしても試験への参加はやめてくれる？

それに是非、来年、君と遊んでみたいからね」

「嫌、って言いたい所だけど、無理そうだね」

少女は男を軽く一瞥したあと、くるりと身を翻し歩きだした。

「またね、シュナ」

「私の方は、出来ればもう二度と会いたくないんだけど

まあ、いいや、バイバイ、ヒソカさん」

くすりと少女はもう一度男の方に体向けてから微笑し

素早くその場を後にした。

主人公設定

名前・シユナニギヴェン

性別・女

性格・何処か暗い影を背負っている。現実主義。

年齢に不釣合いな態度をとることが多い。

笑うときは笑うし、泣く時は泣く、無論、怒るときは怒るし、

喜ぶときは喜ぶが

何処か他人事っぽく、少しおかしい。(特に目立つ程ではな

い)

年齢・16歳

容姿・明るい茶色の髪に深緑色の大きな瞳を持つ。

髪型は、ベリーショート。

服装は、黒色のチュニックに白色のパンツ、赤いラインの入った白色のスニーカー。

系統・具現化系 とある修行により後天的特質系に変化する。

能力・ルービツクキューブの6面に合わせて6の能力を使う。

赤の面〓この能力の中心部であり、弱点、破壊されると念能力が使えなくなる。

人を吸い込んだり、念を吸い込んだりなどはこの面で行えない。

黄の面〓相手をルービツクキューブの中に閉じ込め、気絶させる。

黒の面〓相手の念能力を一時的に破壊する

(使用後、使い手自身が絶の状態になる、

相手の能力の大きさによって絶の期間は変わる)

緑の面〓使い手自身がルービツクキューブの中に入りこみ相手の攻撃を防ぐ

(使い手が使用後一時的に幼児化する)

青の面⇨相手のオーラを吸い取り強制的に絶状態にする。

白の面⇨青の面で相手から吸い取ったオーラで傷を癒す（病は治せない）

武器・通常⇨ナイフ or 竹刀、念⇨ルービックキューブ

その他・赤ん坊の頃孤児院に預けられた後、

新しい親に引き取られ何不自由なく育つ。

しかし、物を買ひ与えることだけが愛情と誤っている両親や利用され利用しだけの友人関係の中で成長したせいでは何処か歪んでいる。

何故自分がここに存在するのかの理由を探す為にハンター試験を受けにきた。

主人公設定（後書き）

主人公の性格は少しずつ変わっていきます。

ゴン達との出会いを通して

少しずつ少しずつ普通の少女へと。

緊張×ドキドキ×危機一髪

「えーと、ステーキ定食下さいー」

「焼き方は？」

「弱火でじっくり、のほほです」

1人の少女がとある店にやってきた。
ハンター試験を受けるために。

「お客さん、こちらへどうぞ」

「はい、ありがとうございます」

少女は、愛想よく礼を言ってから、店員の後に続いた。
店の奥には部屋の形をしたエレベーターがあった。
否、エレベーターが部屋の形？

「おなか減ってたんだよね、丁度よかった」

行儀よくステーキを食べ終わり口を拭いているうちに
少女は試験会場へとたどり着いた。

少女が受験プレートを受取った瞬間

ジリリリリリリ

受付の終了を告げるベルの音がなり響いた。

「ただ今をもって、受け付け時間を終了いたします」
周りの空気が緊張という言葉で固まる。

「うわ、危なかった、ということは、私で最後までわけね」
そんな中、少女は普通にああ、よかったと呟いた。

「ではこれよりハンター試験を開始いたします」

そうして、少女は、走り出す。
新しい出会いを見つけるために。

再開×憂鬱×急ぎ足

「いったい、何処まで走るんだろう」

「本当だよ、ただ走るだけって、つまらないよね」

「そうそ…お兄さん、また、きたの？」

私は、ただ走っていた。

一次試験の内容はとても簡単。

試験管のサトツさんについていくだけ。

「久しぶり、シュナ

それより、どう？つまらないし、殺らないかい？」

「あの、今の発音おかしくなかったですか？」

「ちょっとした、冗談だよ」

試験の内容はとても、分かりやすく確かに簡単だった。

けどさ、ゴールも見えない真っ直ぐな道を

ただひたすらに走るのって精神的に相当きつい。

なのに。なのに。

ピエロみたいな格好をした変なお兄さんに絡まれてしまった。
不幸すぎる。

「はあ、何でもいいですけど」

私、凡人なので、近寄らないで下さい

私まで痛い視線浴びるんですけど」

「つれないね、別にいいじゃないか

それに、去年の試験で僕に堂々と話しかけた君は、

もう既に何かの武勇伝のように有名になっちゃってるから、

色々と諦めた方がいいよ」

「うわ、最悪です」

そうそう、そういえば、私、去年このお兄さんがあまりにもムカついたから

文句言いにいったんだっけと一人頭の中で回想してみる。

となると、そんな武勇伝を広めやがったやるーには、心辺りは一つしかない。

新人潰しのトンパ、あの人でまず間違いないだろう、うん。

というか、お兄さんにだけは、言われたくないよ、色々諦めるなんて。

「まあ、そんなに言うなら今は、離れてあげてもいいけど

「じゃあ、またね」
そういうと、私の返事も聞かず一方的に前の方に向かって走っていった。

「はあ、私は、もう2度と会いたくないと去年も言ったはずなんだけどなあ……」
1人、憂鬱そうな少女の声は、走る集団の足音にかき消され、静かな空気の中に溶け込んだ。

再開×憂鬱×急ぎ足（後書き）

えと、ここから、キャラ視点にしていきたいと思います。
ヒソカさんとしか、まだ絡ませられてないという、
すみません。

次はゴン君かキルア君を出そうと思ってます。
よろしく願いします。

こんにちは×生き物×不思議

『ねえねえ、お姉さんっ』

「へ？」

服の裾を引っ張りながら

お姉さんなんて、親しげに声をかけてくるなんて人物に私は心当たりが無いのだが。

『お姉さんってばっ』

あまりにもしつこく服を引っ張るので仕方なく後ろを振り向いてみた。

「やっと気づいてくれたっ」

…いや、そりゃ、服の裾引っ張られたら気づくだろう、普通。

という、突っ込みはしないことにした。

たとえば女性の服を引っ張るなどという相当失礼なことをしていてもね。

年下みたいだし。

「何？少年」

「俺、ゴン、お姉さん、走るの速いねっ」

まあ、とにかく、話しかけるしかないだろう。

そう、思い、話しかけたところ、きらきらっとした目で純粹に褒められた。

…何この子、生まれて初めてみるタイプだよ。

何の得にもならないのに他人のこと褒めるなんて、変なの。

「ゴン君ね、私は、シュナ

んでさ、走ることに關して、君の方が速いはずだよ

ほら、さっき、銀髪の子と前の方にいたじゃん？」

「！、シュナさん、俺のこと気づいてくれたんだ、ありがとうっ
何がありがとうなのか分からないが。

というか、どうやら、この少年は、天然ものらしい。

「いや、お礼を言われても…」

「でも、本当に凄いや、

シュナさんの靴、凄く重そうだもん」

「！、何で？」

「えへへ、ほかの人と走るときに踏み出す足の音が違うから
キルアは、走ってても足の音が全然しなかったから、余計よく
分かったんだ」

にこりと無邪気に笑うゴンという名の少年。

初めて、見る種類の人間。

というか、そのときの私には、何か人間とは、別の生き物に見えた。

こんにちは×生き物×不思議(後書き)

後書き シユナの靴の底には錘が入ってます。

ゴン君出せました。

話あまり進まなくてすみません。

殺し屋×人形少女×対話(前書き)

更新してなかったです。

ごめんなさい！

殺し屋×人形少女×対話

適当に誤魔化し、ゴン君の傍から離れ、何時間か経った頃
彼らの気配が近くから消えた。

どうやら、走っている人達の噂によると、
レオリオさんという人に何か問題が発生したらしく、助けに行っ
たらしい。

私は、悪いけどついて行かなかった。
距離が離れていたのもあるし、とあるチャンスを伺っていたのだ。

1人の少年とじっくりと話しをするチャンス。

「ねえねえ、君、キルア君、だっけ？」

「！、何」

気配を隠し近寄った私に
明らかに懸念な表情を見せる。

うん、可愛いな。

もちろん、ヒソカさんの意味じゃなくて！

「いや、とくに用はないんだけど
お話ししてみたいなーって」

「あつそ、ところで、お姉さん、何者？」
真っ黒な闇のような瞳に
伸びる爪。

なるほど、さすが、噂に名高い、例の一家の殺し屋だ。

「ああ、自己紹介がまだだったね
私は、シュナだよ、よろしくね」

「…そういう意味じゃないんだけど、
まあ、いいや、よろしく、シュナ」

「年上に呼び捨てとは、私はいいけど、誰かに怒られないように気
をつけるんだよ」

そう言っている間にゴン君の気配が近くなってきたのを感じる。
そろそろ、離れるか。

「あ、私、用事思い出しちゃった、じゃあ、また」

「ちよ、」

そう言って、軽く微笑み、引き止めるキルア君の声を無視して、そ
の場を立ち去った。

2人が友達になれることを祈って。

魔獣×命×ハント（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます！

更新遅いですが、ぼちぼちやっていきたいと思えます。

よろしくお願いします！！

魔獣×命×ハント

走り続けること、えーと、どのくらい経ったか分からないが今、やっと、出口の光が見えてきた。

とりあえず、ほっと一息つく。

何せ、気がつくと、この二人が私にまわりついて離れなくなっていて、

基本、孤独を好む私としては、早く一人になりたかったのだ。

「やっと、出口だね！」

「シユナ、すっげえ、汗かいてるけど？」

「嫌味は、スルーするとして、

何で二人して、私にくっついてくるのかな…」

しかし、何でこうなった。

個人プレーで合格しようとか格好良いこと考えてたのに！

いつの間にか談笑しながら、走る状況になっちゃってるし。

出たら、絶対、ぜーったいに二人からは、離れるぞ！！

「だって、シユナさんと仲良くなりたいたんだもん！」

そんな私の心の声や表情に全く気づかない様子で

満面の笑みでそんなことをさらっと言ってくれるゴン君に

ああ、くそう、可愛いな、このまま、一緒でもいいかも…って、だめだめ

なんていう、甘い考えが一瞬出そうになる。

こんなの反則だ。

「俺はただの興味本位だけど」

それに対してにやりと嫌な笑みを浮かべるキルア君。

何この差は…。

精神的に疲れてきたとき

やっと、トンネルの中から抜け出せた。

が

「うわ、出れたは、いいけど、まだ、走るの？」

広いジャングルのような場所。

まだ、次の会場ではないんだろぅなということが軽く予想できる。

次の試験管いないし、小屋とか、それっぽいものもないし。

「うん、サトツさんが説明してるし、そうみたいだね！」

「シユナ、息切れてるぜ？」

「だから、君はどうして、こぅも可愛げがないのかな…！」

キルア君にムカつきつつも、サトツさんが何やら、喋っているのを死にたくはないので、真面目に聞くことにした。

…サトツさん、魔獣がどうのこうの言ってる。

しかも、サトツさんを見失ったら最後死亡フラグがたつ的なこと言ってるし！

死ななきゃいいな、私。

と、思った瞬間

『嘘だ！そいつは、嘘をついている！！』

「ああ、面倒そうなことが始まった…」

いきなり、男の人が出てきて、自分が試験管だ！的なことを叫んだ。てか、魔獣だよな、あの男の人、たぶん。

動揺したみんながわめきあっているときに

サツと二枚のトランプが宙を舞った。

「そつちが本物だね」

叫んでいた男の人の額にそのトランプの一枚が突き刺さり

サトツさんの方はそのトランプを軽く受け止めていた。

サトツさん、さすがだなあと思いつつ、ため息を吐く。

ヒソカさん、そろそろ、やばいのかな？

「次からはいかなる理由でも私への攻撃は試験管への反逆行為として、

即失格とします、よろしいですね？」

「はいはい」

サトツさんの注意を受けても、適当に受け流してるし。
スイッチ入ったっぱいかな、微妙に殺気も出てるし、できる限り、離れるか。

「二人とも、ヒソカさんには、気をつけたほうがいいよ

私、ちよつと、先行くわ」

二人にそれだけ忠告してから、
素早く鉛の入った靴を脱ぎ
靴から普通の運動靴を取り出し、履く。
鉛の入った靴は靴の中に入れた。

「ちよつ」

たんとと地面を蹴り、走り出すと
案の定、後ろの方から悲鳴、というか、断末魔が聞こえてきた。
極力サトツさんに近い位置で走ろうと冷静なことを考える反面
ゴン君達のことか心配でしかたがなかった。

手当て×お礼×照れ屋

前の方の早い組でとつと二次試験会場にしていた私は一人、木の下でペットボトルに入つたお茶を飲んでいた。ゴン君達、大丈夫かなとか色々考えながら。そんなとき、後ろから嫌なオーラが私に向けてぶつけられた。

「やあ、シユナ」

「ヒソカさん、話しかけてこないでくださいって言ってますよね？
…って、あえて聞きたくもないんですけど、その人どうしたんですか？」

「ちょっとね、彼は合格だ」

「色々の意味分かりませんよ
…あの、グラサンのお兄さん、大丈夫ですか？生きてたら返事してください！！」

「気絶してるから、当分起きないと思うけど」
「何なんだ、このピエロは！
いきなり、何で男の人担いでる現れるの？
いや、この人が何かしたのは明白なんだけども。」

「とりあえず、ほっぺ冷やさないと」

ヒソカさん、責任持って、安全で冷たい水探して
このペットボトルに入れてきてください」

「仕方ないね」

「誰のせいですか！」

「はいはい？」

「気持ち悪いわ！」

数分後、あつという間に戻ってきたヒソカさんから、
水の入ったペットボトルを受け取った。
用も済んだので、ヒソカさんをしっしと追い払う。

「ハンカチに浸してっ」と

ペットボトルの水をハンカチにかけ

男の人の頬に当てる。

腫れが早くひくといいいのだが

というか、あれ、確かこの人、ゴン君と仲が良い人じゃなかったっ
け。

しまった、また、懐かれる！

「あ、シユナさんっ！」

と私が考えている間に

ゴン君達がやってきてしまった。

早く気がつけよ自分。

「レオリオ！シュナさんが、手当てしてくれたの？」

「いや、その」

「ん、う」

「あ、レオリオが起きた！！」

レオリオ、シュナさんが、手当てしてくれたんだよ！」

ゴン君余計なことを言うな。

が、しかし、レオリオさんは、どうして、自分が怪我をしたのかよく覚えていないいらしかった。

助かった。

「いやもでも、こんな可愛いお嬢ちゃんに

手当てしてもらったことは間違いねえんだ

助かったぜ！！」

「そ、そんな、たいしたことしてないですから！」

「私からも礼を言おう、ありがとう」

いやいや、だから、そんなにお礼を言われると

照れるじゃないか!!

「あれ、シユナさん、顔真っ赤だよ、熱？」

「ちちち、ちが、私はいたって元気健康やつほーって感じだから！」

「？、なら、いいんだけど」

私が一人慌てふためいている間に
二次試験開始の音があった。

脱落？×動物×怖がりさん（前書き）

壊れたおもちゃを

直してみるのも

悪くはないか。

脱落？×動物×怖がりさん

「豚の丸焼き？」

「シュナさん、どうしたの？顔色悪いよ？」

「ごめん、私、帰る」

「ええ?!」

「トンネルどっちだっけ、あそこを通れば」

「早まるな、シュナ、おなかでも痛くなつたのか？」

急に顔色を真っ青にして
シュナさんは、首を横に振った。

「私、動物傷つけるとかって一切できないの」

「はあっ?!」

「人間と戦うとかならないんだけど、

どうも、動物だと目が合うと感情移入して」

「意味分んねえぞ、お前！」

キラアが心底驚いたという風にシュナさんにそう言っても
ただ、シュナさんは静かに首を横に振った。

「とにかく、無理なものは、無理なの！

私は帰るから

みんな、頑張ってね」

「え？ちよ、シユナさん！」

振り返ることなく、シユナさんは、来た道の方に引き返していった。
ど、どうしよう。

「シユナじゃないか、何してるんだい？」

帰っている途中に待ち伏せていたかのように

ヒソカさんが豚さんで道を塞いでいた。

何この量は！

喋りたくはないが、無言で通らせてくれるわけもないだろうっから答える。

「…何もありませんよ、帰るんです」

「人は殴れるけど、動物は殴れない、とか言うんだろ？」

「そうですね、何か問題でもありますか？」

「ちょうどよかった

僕、気がたつててね、間違えて五頭ぐらいしとめちゃったんだ？
君の分も焼いてあげるから、持って行っていいよ？」

私の中で二つの選択肢が浮かぶ。

- 一、ありがとうございますと礼を言い素直に受け取る
- 二、借りは作りたくないので断る

…どうしようかな。

いい加減試験合格しないと、お父さんがうるさいだろうし。
仕方ない。

「ありがたく、頂戴します

借りはいつまでにどのようにして、返せばいいですか？」

「物分りが良くていいね、シュナは？

試験が終わったら、君と一度戦ってみたい、いいかい？」

「分かりました、ただし、場所はこちらで指定させてもらいます」

「了解

ちょっと、待ってて？」

面倒なことになったが仕方がない。

お父さんは絶対だから。

少女の瞳から

一瞬感情が消えたのを

奇術師は見逃さなかった。

空っぽ×同じ×心

「握りズシか、うーん」

二次試験のテーマはお寿司だ。

しかも、握りズシ。

修行しないと握れないんじゃないのか。

大体、ここ、海ないよ。

川の魚とか、ここ、ゲテモノしかいなさそうなんだけど。

仕方ない。

「すみません、メンチさん

この辺に、カメとかいますかね？」

「いると思うわよ？」

「そうですね、ありがとうございます」
それだけ聞ければ十分だ。

私は、一人、試験会場から飛び出した。

「カメ？」

「たぶん、卵がほしいんじゃないかしら？
スシ、知ってるっぽかったわよ」

「ああ、なるほど」

「カメさん、どこですかーっ」

「…カタカタカタ」

「ひいつ、おお、お化け?!ご、ごめんなさい、静まってください
お酒ですか?それとも、油揚げ?、生き胆だけはご勘弁を!」
我ながらに意味の分からない発言。
ていうか、よく見たら、この人服にプレートついてるよ!
失礼極まりないことしちゃったじゃないか!!

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい
私、目が悪いもので、いや、本当すみません
受験者の方だったとは気づかず」

「カタカタカタカタ」

いや、でも、わめいても動物は出てこないと思っよっ。」
分かってるわ！見つからないから自暴自棄に陥ってただけだとは言えない。

逆らったら、容赦なく殺されるぞ、きつと。

だって、この人、怖いもん、オーラが禍々しすぎる。

「まあ、いいけど、いいよ、行って」

「あ、う、」

「何？怖くて動けなくなった？」

体を開放されたはいいものの、腰が抜けて立てなくなってしまった。

「これだから、殺さないって面倒なんだよね」

「ひっ」

「でも、君は、たぶん、俺と同じだよ

立とうと思えば立てるはずだ

その、ごっこ遊びをやめたらね」

何を言われているのか分からない。

ごっこ、遊び？

殺し屋は見ていた

気づいていた

少女の身振り手振り、言動全てが

マリオネットが動かされているように、

何処か陳腐で

ばらばらだと。

嫉妬×人形×八つ当たり

「君さ、その目でナニを見てるの？」

ガラスでできたみたいな、その目で

「は、い？」

「君、自分の意思で喋ってないよね？」

要するに、ただの喋る中身は空っぽの人形だって言ってるんだけど分かる？」

この人、何言ってるのと思う反面

心が酷くざわついた。

何かが零れだしそうで

心の中にかけてあった大切な錠を容赦なく無理矢理壊されるようなそんな感覚。

「…まあ、どうでもいいけど

俺は行くよ」

男の人は一人歩き出した。

私は動けなくて。

ただ、その人の背中を見送った。

「ヒソカのお気に入り、アレ、完全に壊れてるよ?」

「知ってるよ」

「まあ、別に俺には関係ないけど
どうしたいわけ?アレを」

「人間にしたいんだ?」

「人間ね」

俺が言うのも何だけど、アレは欠陥品だ。
人間としての感情を持っているが
持っていない。

自分の意思で話していない。

話している相手が望む態度を取るように

アレは、そういう風な躰を受けたんだろう。
俺と同じように、いや、俺よりも明るく暗いとこらで。

「ならないと思っけど」

「じゃあ、賭けようか?」

「いいよ、暇つぶしに、俺が勝ったら、仕事手伝ってよ」

「分かった じゃあ、僕が勝ったら、僕の仕事を手伝って?」

ヒソカは何を考えているのか。
俺にはやっぱり、理解できないな。

「あ、シュナさん!! 大変なんだ、全員失格にするって、試験管の
人が

?、シュナさん? 大丈夫?!」

「ゴン、くん、私」

「何ぼけつと突っ立って、おい、しっかりしろよ、焦点があってな
い...?」

「何っ?! おい、シュナ、シュナ! 私の声が聞こえるか?!」

「怪我はねえか?!」

訳が分からない。

何なんだあの人は。

私は、

『その目でナニを見てるの?』

『ガラスでできた目で』

『空っぽな人形』

頭の中をぐるぐる半数する言葉。

気がつくと涙が止まらなくなっていた。

「シュナさん！しっかりして、俺がいるから！！」

「あ、」

「ごちゃごちゃの頭の中。」

止まらない涙。

そのとき、そっと、

私の手に暖かくて柔らかいものがあたたった。

そうして、ぎゅっと手を握られた。

ああ、これは、誰かの、手？

「よかった、やっと、俺の方を見てくれた」

「ゴン、君？」

ぎゅっと私の手を握ってくれたのはゴン君で。

すっごく心配そうに私の方を見てくれてて。

胸が温かいモノで満たされていくのを感じると同時に

ぷつんと何かの糸が切れたように私は意識を失った。

嫉妬×人形×八つ当たり（後書き）

イルミさんのは

キルアに似ているが

自分が闇人形として、育てたいのに言うことを聞かないキルアに対して

きちんと人形として生きることを守り育っている人形少女への
ただのらしくない八つ当たり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9039n/>

子猫のワルツ

2011年11月23日13時49分発行